

ルカによる福音書24章1-8節 「ここにはおられません」

アウトライン

1A 死と罪の法則

- 1B 死という不条理
- 2B アダムによる死
- 3B キリストによる贖罪

2A 復活の法則

- 1B 自然にある復活
- 2B 人に備わった復活
- 3B 復活に気づかない人々
 - 1C 恐れという反応
 - 2C 通りがかりに気づかない姿
 - 3C 体という現実
- 4B 世界の回復

3A 福音の言葉

本文

ルカによる福音書 24 章 1-8 節からお読みします。

¹ 週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に来た。² 見ると、石が墓からわきに転がされていた。³ そこで中に入ると、主イエスのからだは見当たらなかった。⁴ そのため途方に暮れていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着た人が二人、近くに来了。⁵ 彼女たちは恐ろしくなって、地面に顔を伏せた。すると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。⁶ ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出さない。⁷ 人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」⁸ 彼女たちはイエスのことばを思い出した。

衣を着た人二人、天使ですが、彼らが女たちに言った言葉に目を留めてください。「**あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。⁶ ここにはおられません。よみがえられたのです。**」とあります。女たちは、イエスが墓に葬られて、香料を遺体につけるために三日目の早朝に来ました。当時は遺体をそのまま洞窟のような岩を掘った穴に葬ります。遺体臭を消すために香料をつけるのですが、そこにイエスの体がなかったのです。一体何が起きているのか分からずに、途方に暮れているところで天使が二人来て、「**どうして生きている方を死人の中に捜す**

のですか。⁶ここにはおられません。よみがえられたのです。」と宣言しました。

私たちキリスト者は、毎年この時期にイースター、日本語に訳すと復活祭を祝います。ちょうどこの出来事が、この時期に起こったからです。日本では桜が開花するような時期に、イスラエルでは大麦の初穂が出る時期です。その時に「初穂の祭り」というものがあります。その日曜日の朝に起こった出来事です。

けれども、実は私たち教会に集っている者たちは、毎週、日曜日がこのことを祝っているといっても過言ではありません。仏式の葬儀であれば、夏に盆の季節があり、その時に先祖の墓参りをします。そして何回忌ということで法事を行ないます。しかし、私たちはイエスが、墓に葬られていたけれども、三日目にそこにはおらず、よみがえられたことを信じて生きています。日本の仏式の葬儀では、死んだ人々に対して礼を尽くし、死者に対して奉仕をします。けれどもキリスト者は、「墓には死体がなかった」ことを確認して、生きている神に奉仕します。つまり、イエスがよみがえって、今も生きていることを確認しているのです。



この写真を見てください。これは実際のイスラエルにおいて、イエスが葬られたと考えられる墓です。当時の墓はこのように岩を掘った穴を使いました。そして中に入れば、そこには遺骨がないのです。そしてこの看板は、「He is not here. He is risen.」つまり、今ここで読んだ「ここにはおられません。よみがえられたのです。」とあるのです。この方は生きています。今も生きています！

1A 死と罪の法則

1B 死という不条理

私たち人間は死ぬのは、当たり前だと思っています。人は必ず死にます。また生き返る、復活す

るという話をするのであれば、一笑に付してしまうことでしょう。「何をたわけた事を言っているのか。」と。けれども人間は、「死ぬのは当たり前」ということで満足できていません。愛する者の死を目の前にして、それは当たり前であると受け入れられません。「死」というものにある不条理を、ここで見るのではないのでしょうか？

イエスには、マルタとマリアという姉妹と親しい関係にありました。またラザロという兄弟がいて、彼は危篤になりました。イエスが彼らの家に到着した時には、彼は死んだ四日も経っています。ここには多くの人々が大声を出しながら嘆き悲しんでいました。そしてマリアが泣いている姿を見、また他の人々も泣いている姿を見て、「イエスは涙を流された」とあります。そして、「心のうちに憤りを覚え」た、ともあります(ヨハネ 11:35,38)。この後、イエスは「ラザロよ、出てきなさい！」と大声で叫ばれて、彼を生き返らせました。けれども、その涙と憤りは現実です。人が生を持ってこの世に現れたのに、なぜ死をもって終わらなければならないのか、という、やるせない思いと憤りなのです。人間は「死んで当たり前」などと簡単に片付けられない呻きを、魂の中に持っています。

私たちは日々の生活をこの現実を知りつつも、意識の奥深くに押し込めながら生きています。この生活は、人生に空しさを与えていきます。「今は生きているけれども、どうせ死ぬのだ。」という諦めた思いを持っています。生きがい在这个世で見つけようと思いますが、どうせ死ぬのだということが分かっている時に、空しさが訪れます。聖書の中に、「生きがい」と呼ばれるもののあらゆることを行なった人の伝記が残っています。「伝道者の書」と呼ばれています。それを書いたソロモンは、イスラエル国がもっとも大きく、豊かになった時に治めていた王でした。宮殿にあるものは、すべて金が使われていました。銀は石ころのように考えられていました。彼には知恵がありました。その王が下す裁判は、極めて優れていました。あらゆる箴言や植物図鑑も書き記していました。そして軍事的にも政治においても、力を持っていました。そして快樂もありました。なんと妻が三百人、そして側めが七百人もいたのです。学問も、事業も、そして快樂もあったのですが、その伝道者の書の書き出しはこうだったのです。「1:2-3 空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。3 日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。」

日々、家に帰ってテレビを見、ビールを飲んだりするのがある意味で、生きがいと言えるかもしれませんが、心の奥底では、「それだけはないはずだろう・・・。」という思いがないのでしょうか？伝道者の書には、「3:11 神はまた、人の心に永遠を与えられた。」ともあります。日々の生活を越えたところの、真の命というものがあるのではないか、という疑問を薄々感じながら生きているのです。パスカルという数学者また哲学者がフランスにいましたが、彼はこう言いました。「人の心の中には、神が作った空洞がある。その空洞は創造者である神以外のものよっては埋めることができない。」その薄々気づいている疑問は、創造主である神にしか埋めることのできない空洞です。

2B アダムによる死

聖書によれば、人は元来、死ぬようには造られていなかったのです。天と地を創造された神は、

人をご自分のかたちに造られました。そして、園にあるあらゆる木々とそこから出てくるあらゆる実を食べなさいとアダムに命じられました。けれども、園の中央には命の木と善悪の知識の木がありました。神はアダムに、「善悪の知識の木から取って食べてはならない。食べたら必ず死ぬ。」と警告しておられました。ところがアダムが食べたのです。そこから死が入りました。彼はすぐには死なず、長寿を全うしましたが、それでも死んだのです。神が命じられることに逆らったことにより、死がこの世界に入ったのです。つまり、罪によって死が生じたということです。

世界の人々はみなアダムの子孫なので、ちょうど DNA のように罪をもって生まれ、そして死ぬようになってしまいました。ちょうど服の上のボタンを掛け違えますと、その下のボタンがすべて掛け違えるように、アダムから出てきた私たちはみな、初めからボタンの掛け違いのような状態で生まれてきたのです。自分の生命を与えておられるのは天地を造られた神なのに、この神を神として認めずに生きることが聖書では「罪」と呼んでいます。そしてその罪によって死ぬ運命の中にいるのです。これを聖書では、「罪と死の原理」とも呼んでいます。

3B キリストによる贖罪

そこで先ほど話に戻しましょう。イエスが墓からよみがえった、とのことですが、どのようにして死んだのでしょうか？彼は自然に死んだのではありませんでした。刑死でした。刑罰による死です。十字架という、ローマ帝国が編み出した、殺人や反乱・騒擾罪に適用した極刑です。あえて大通りのそばで手足に釘を打ちつけ、徐々に殺していく姿を見せることによって、人々にローマに逆らうことによる恐ろしさを見せつけたのでした。

なぜイエスが、そのような刑に処せられなければいけなかったのでしょうか？福音書の記録では、十字架刑に処したローマ総督ピラトは、彼に何ら罪を見出すことはできないという証言しました。彼はユダヤ属州の支配者でしたが、ユダヤ人を治めることに手をこまねいていました。その中で、ユダヤ人がイエスを殺せという圧力に屈してしまった、というのが実情です。しかし、イエスご自身はこう言われたのです。「マタ 26:54 しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」聖書に書いてあることが実現されるために、あえて自らその刑を受けられたのです。

聖書に書いてあることとは次のことです。先ほどアダムが罪を犯した話をしました。その後神は、羊などの動物によるいけにえを行なうようにされました。その羊を屠り、血を流し、そして祭壇の上で火で焼くのです。動物のいけにえをもって、ご自分を礼拝するように命じられました。それは、血を流すことによって罪を赦すためです。罪によって死が来ました。けれども、神は人の罪を赦したいと願われました。そこで身代わりとなる動物に死を与えられたのです。血を流すようにされたのです。羊が血を流し、火で焼かれているが、あなたの身代わりになったのだよ。」ということ語られたのです。

そして、イエスがこの地上に現れた時に、バプテスマのヨハネという預言者がイエスを見て、「見よ。世の罪を取り除く、神の小羊」と叫びました。動物ではなく、神から来たイエスご自身が私たちの罪の身代わりのために、いけにえとなられたのです。

これが、私たち人間の罪を取り除く方法です。私たちの内にある、罪の根っこを取り除くことができます。「罪」と言っても、単なる嘘をつくとか、盗みをするとか、嫉妬するとか、不品行、怒りなどのようなものではなく、心が自分自身に向いている、心の深みから出てくる、生まれつき持っているものです。これを宗教は、人の行為によって償うことができると教えます。善行を積んでいけば、死んだ後に良いところに行くことができると教えます。修行、また自己啓発によって人間の理想に到達できると教えます。けれども、聖書は、私たちの行為なんかでは決して拭い去ることのできない、私たちの中核にその罪が横たわっていることを教えているのです。それゆえ、私たち自身ではなく、神ご自身がご自分の子キリストによって取り除くようにしてくださったのです。

2A 復活の法則

これが、イエスが十字架につけられた背後にある全貌でした。けれども、そのことが分かっている人は当時、誰もいませんでした。イエスを信じて、イエスについていった弟子たちや、女たちも分かかっていませんでした。けれどもイエスは何度も、「わたしは引き渡されて、十字架につけられて、そして三日目によみがえる。」とはっきりと前もって言われていたのです。イエスが確かに復活されたことを知った後で、彼らはようやくこの方が死なれたことの意義を知るに至ったのです。

イエスがよみがえってから、「罪と死の原理」に対抗する、「復活の原理」あるいは法則が始まりました。神はキリストにあって、この世界に復活という希望、死んでも生き返るという法則を導入されたのです。イエスはマルタに言われました。「ヨハ 11:25 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」

1B 自然にある復活

「死んで生きる？そんなことあるわけじゃないじゃないか。」と多くの人が反発すると思います。けれども、自然の中にも、相反する法則が働いています。空気力学を考えてみてください。あの鉄の塊である飛行機が、もの見事に空中に飛んでいくのです。近代になるまで、飛行機のことを話したら「お前はなんと非科学的なものか。物は地面に落ちるのだ。そんなことがあるはずがない。」と答えたことでしょう。重力の法則がありますから。けれども、鳥がなぜ空を飛んでいるんでしょうかね、そんなことは考えずに私たちは、相反する法則を見るとそのように反発するのです。

重力の法則は事実です。同じように人は必ず死にます。その事実は変わりません。けれども、重量の法則に対抗し、物を空に持ち上げる空気力学があるのと同じように、人が死んでも、それでも生き返るという法則があるのです。神は、二千年前にキリストを先駆者として開始されたのです。

自然界の中には、「復活」を表すような現象はたくさんあります。例えば種を見てください。種はそのままでは何にも起こりませんが、土の中で分解すると発芽して、成長し、多くの実を結ばせます。人の生命力もその通りです。医学においても原因の分からない病というものがありますが、反対に医学によっても分からずに治癒された、という話は多く聞きますね。テレビ番組でも、「奇跡体験 アンビリバーボー」の中でしばしば出てくる話です。

2B 人に備わった復活

私たちの教会は、11年前に教会を始めた時に、東北の被災地に救援旅行に出て行きました。その中で私自身の心は喜びを持っていました。瓦礫を見て、けれども、そこでたくましく生きている東北の人々を見て、私は心の中で「神は生きておられる」と実感しました。信仰の中で神を見ていました。信仰の中で、この地域に復活の原理が働くことを見て、それで神をほめたたえました。考えてみてください、17年前に震災を受けた神戸阪神地域は、今どのような姿になっているでしょうか？しっかりと復興しています。広島と長崎はどうでしょうか？原爆で命を失ったことに対する深い悲しみはありますが、エネルギーに満ちあふれる都市に変貌しています。広島市民の女性は、日本の政令指定都市の中で、平均寿命で第一位となりました(2005年)。人間の生命力においても、神は復活の原理を働かせておられるのです。

人は死ぬということが、生きることのお機恵となります。被災地の話に戻しますと、宮城県の奥松島というところに、ある集落があります。津波によってほとんどの家が全壊しました。けれども、興味深いことに、昔、火事が起こってもそれが広まらなかったと言われています。なぜか？江戸時代か昔に大地震が起こり、その倒壊後、その集落を再興するときに小道を沢山つくったそうです。そのおかげで、火の手が回りにくくなったということです。そして今、家屋が全壊してしまったけれども、また皆の知恵をしばり出して、むしろ以前よりもすぐれた村づくりをつくることができると、その地区長さんが話してくださいました。

3B 復活に気づかない人々

このように神は、復活という原理を働かせてくださっており、事実、人の肉体が死んでもよみがえらせることを、キリストにおいて行なってくださいましたのです。けれども、多くの人がこの事実には気がついていません。イエスを取り巻く人々も、初めはこの事実には気づきませんでした。

1C 恐れという反応

ルカ 24 章 4 節をご覧ください。墓にイエスの体がなかった、というのは、とてつもない喜びの知らせです。これまでイエスについてきた女たちは、イエス様をこよなく愛していました。ですから、空の墓を見て、イエスがよみがえられたことを喜ばなければいけません。ところが 4 節にどう書いてありますか、「**途方に暮れている**」とあります。イエスがよみがえらえたという、極めて確実な状況証拠であるにも関わらず、途方にくれてしまったのです。

それでそこにいた二人の天使が、5 節で「**あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。**」と言いました。女たちは、墓にいるはずのイエスの体がなかったことで途方に暮れていたのです。けれども、イエスが生き返ったという事実を知れば、単純明快なことです。けれども私たちの人生において同じことが言えるのではないのでしょうか？自分にとっては途方に暮れるような出来事が、自分の身に起こりました。けれどもそれは実は、神が生きておられることを示す一つの徴であるかもしれないのです。神が生きて働いておられると考えれば、実に単純なことなのに、なぜこんなことが起こっているのか分からないと、途方にくれることが多いのです。

けれども天使たちは、イエスがよくお話になっていたことを思い出させました。十字架につけられるが、三日目によみがえると話しておられたのではないかと言いました。それで8 節、「**彼女たちはイエスのことばを思い出した。**」とあります。

2C 通りがかりに気づかない姿

けれどもルカによる福音書 24 章を読みすすめますと、弟子たちは信じられなかったことが書かれています。その中の二人の弟子が、エルサレムから離れて、エマオという村に歩き始めましたが、そこにイエスが共に歩かれました。そして、彼らに聖書の初めから終わりまで、キリストが苦しみを受けて、その後に栄光を受けるということを説き明かされました。聖書のことば、そしてイエスのことばを聞いて、彼らも女たちと同じように胸が高鳴ってききました。心が燃えてきたのです。その後で、共にパンを食べていた時に、この方がイエスであることを知ったのです。

3C 体という現実

だんだん、復活の事実に気づき始めた人が増えていったのですが、ついに皆が一同で集まっている真ん中にイエス様が現れてくださいました。みんな、あまりにも嬉しくて信じられないでいます。ほったをつねっていたかもしれませんね。そこでイエスは、「24:39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」と言われました。そして食事を持ってくるように命じられ、その食事を召し上がりました。つまり、復活というのが、幽霊を見るような夢物語ではなく、事実であり現実だったのです。キリストを信じる者にとって、その信仰は心の中で作り上げた物ではなく事実であり現実なのです。復活されたイエスが心の内に生きて、働いておられるのです。

私事で話していただきますと、高校生の時は抑うつでした。それがイエス様を信じてから、しばらくしてすっかり直りました。沖縄にいる、あるクリスチャンの友達があります。彼は酒とギャンブルにはまっていたが、イエスを信じてそれをやめ、ギャンブルによる借金も返済しました。そして、アメリカの人ですが、麻薬のやりすぎで、鏡で自分を見たら、頭と顔の半分がなくなっている状態の人がいました。廃人いや狂人になっていたのです。けれどもイエス様を信じて、完全に直り、今は一万人以上の信者を抱える教会の牧師になっています。私たちの思いの中で作り上げたお話であれば、そんなことが起こるのでしょうか？生けるイエスは、信じる者の中に現実として、事実とし

て働いてくださるのです。

4B 世界の回復

そして聖書は、キリストから復活が始まったけれども、キリストを信じる者も終わりの日によみがえることを約束してくれています。そしてキリストが再び来られる時には、この世界全体も新しく造りかえられることを約束しています。世界が今はどんどん悪くなっています。異常気候、地震などの天災、そして経済や金融危機、戦争の噂など恐ろしいことばかりです。けれども、ここにも神は復活の原則を働かせてくださいます。キリストが再び来られるときには、世界が根底から新しくされるのです。

3A 福音の言葉

これを、聖書では「福音」と呼びます。「良い知らせ」あるいは「喜ばしい知らせ」という意味です。英語ではゴスペル、そうゴスペル・ミュージックは「福音」の音楽という意味です。パウロという伝道者が、福音を次のように述べています。「I コリ 15:3-5 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、5 また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。」福音は、第一に私たちの罪のためにキリストが死なれたことです。第二にキリストが葬られたことです。つまり、確かに死んだのです。けれども、第三に、三日目によみがえられたことです。この三つを、自分に対する知らせとして受け入れるのであれば、復活のイエスは、あなたの心の中にも入ってきてくださいます。